

# 定期接種化を検討しているワクチンの本審議会での検討状況のまとめ

ワクチンの種類	目的	疾病負荷 (まん延状況、重症度)	国民の 免疫保有状況	感染力	費用対効果	備考
おたふくかぜ ワクチン	新規対象疾病の検討 (小児)	・4-5年ごとに全国規模の流行あり ・合併症としての脳炎、難聴(幼児/学童期と30~40歳代の二峰性)は予後不良	接種後の抗体持続時間はおよそ12年	高い	良好 (2回接種の場合でも)	副反応の頻度に関するデータ取得中(対象者10万人目標)
带状疱疹 ワクチン	新規対象疾病の検討 (高齢者)	・罹患率は60歳以上で10/千人・年程度、入院は3.4%程度 ・高齢ほど後遺症(PNH)の罹患率が高い	免疫力低下による再帰感染(70歳代で発症のピーク)	低い (再帰感染)	導入年齢、ワクチンの持続効果による	期待される効果や導入年齢に関して、検討を要する。
不活化ポリオ ワクチン	就学期前児童への追加接種	国内での発生はないが、発症すると重症度は高く、発生時のインパクトが大きい	IPV接種世代では、年齢が上がるにつれて低下傾向がみられるが、抗体保有率は80%以上維持	高い	算出困難 (国内の発生がないため)	4種混合ワクチンとして、百日せきワクチンと論点が一部共通
沈降13価肺炎 球菌結合型 ワクチン	ワクチン種類の追加 (高齢者)	・令和2年度年に肺炎は死因の第5位(5.7%) ・市中肺炎において肺炎球菌性肺炎は2割程度を占める	IPD、肺炎球菌性肺炎、市中発症肺炎のそれぞれで、PCV13 ワクチン血清型のカバー率は減少傾向	高い	前提となるデータや、血清型の変化等を踏まえた再分析が必要	PCV13の免疫原性はPPSV23と同等もしくは優れていた
沈降精製百日 せきジフテリア 破傷風混合 ワクチン	百日咳の乳児の重症化予防	・就学期児童を中心に患者数が多い ・生後6か月未満の乳児で重篤化しやすい	抗体保有率が低い世代と患者発生の年代が一致	高い	要検討	6つの案があり、それぞれについてデータや費用対効果の検討を要する
9価HPV ワクチン	ワクチン種類の追加	・子宮頸がんのほとんどがHPV感染に起因 ・子宮頸がんの年間調整罹患率・死亡率は先進諸国の中でも高い水準にある	HPV感染者であっても血清中の抗HPV抗体価は一般的に低い	高い	4価と比較して良好	

※ 本資料は、これまでの議論の内容を概略的にまとめたものであり、各ワクチンの検討状況を網羅的に反映したものではないことに留意する必要がある。